

中国・江南の土墩墓（どとんぼ）について

Investigation on Barrow-tombs in Jiannan, China

鬼塚 克忠（おにつか かつただ）
佐賀大学教授 理工学部都市工学科張 敏（ちゃん みん）
中国・南京博物院考古研究所 副所長唐 曉 武（たん しょうう）
佐賀大学講師 低平地防災研究センター

1. ま え が き

今から約2000年前、弥生時代に構築された吉野ヶ里遺跡墳丘墓（B.C. 1世紀）は我が国における、最古の巨大盛土構造物の一つである。版築様（層状。版築に似たという意味）の丁寧でかつ高密度な締固めである。弥生の時代に、既に高度な構築技術が駆使されていることが伺われる^{1),2)}。吉野ヶ里墳丘墓のルーツはどこなのか。中国・長江下流域の江南に多く見かけられる土墩墓（どとんぼ）（B.C. 800～500）ではないかといわれている。最近、江南の寧鎮（南京・鎮江）地区の土墩墓を見て回る機会に恵まれたので、土墩墓について報告したい。

2. 吉野ヶ里墳丘墓の概要

佐賀県神埼郡の吉野ヶ里遺跡に、直線距離で850 m 離れて北墳丘墓と南墳丘墓がある。ともに今から2000 年前に構築された。北墳丘墓^{1),2)}は、南北約40 m、東西約27 m 以上、高さ約2.5（かつては4～5）mである。14のかめ棺ならびに細型銅剣やガラス管玉などの副葬品が出土している。墳丘の中心部から南側にかけては10～30 cm 厚の層状の締固めであり、版築様といえる。締固め度は85～94％である。

南墳丘墓は東西45 m、南北48 m、残存高さ2.8 m である。昨年1998年から本格的な考古学調査が始まっているが、かめ棺は見つかっていない。最近になって、いわゆる墓ではなく、祭祀用の盛土ではないかといわれている。トレンチ断面からは、北墳丘墓に似た版築様の締固めの様子が見られる。

3. 中国・江南の土墩墓

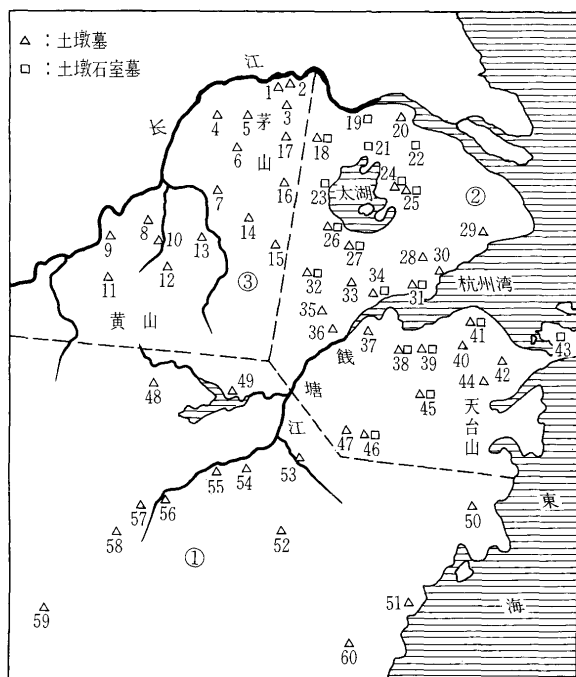
中国・長江の江南地帯の土墩墓³⁾が吉野ヶ里墳丘墓の原型であるとする考古学研究者の考察^{4)～8)}がある。「墩」は「土を盛り上げたもの」という意味である。それゆえ、「土墩墓」は「土を盛り上げた墓」を意味する。「墳丘墓の構築方法は江南の土墩墓に共通する可能性がある」と指摘する森浩一氏⁴⁾によると、「乾燥した華北では、地面より深いところに墓室を掘って死者を埋葬し、その上に目印として墳丘を築く。したがって墳丘内には埋葬施設がないのが一般的である」。「これに対し、華中とくに江南は、湿潤な土地が広がるために、地下に墓室

を掘れば、湿気や水分のため屍は保存されにくいので、地面を盛り上げることで構築した墳丘の内部に埋葬施設を設ける。この場合の墳丘は、華北のように単なる墓の存在の目印ではなく埋葬施設を内部に設けるためのものである」。「したがって墳丘の構築は、少量ずつの土を突固めながら、丁寧に築かれる。これが土墩墓である」。

同じく「土墩墓が墳丘墓の源流ではないか」という樋口隆康氏⁵⁾が江南の土墩墓について書いている。少し長いが紹介したい。「江南の土墩墓とは盛土墳で、地上に埋葬したものである。中原の殷・周時代の墳墓は地下深く坑を掘って埋葬してあり、墳丘をもたないのが通例である。墳丘は秦代以降に出現したとされるので、江南の土墩墓は中国における墳丘初現の例になるかもしれない」。「この土墩墓は長江下流、特に江蘇省南部の太湖周辺から浙江省杭州や安徽省屯溪までに分布している。すなわち呉越の地である。丘陵から平野にかけて、径15～30 m、高さ2～3 m ほどの大小の塚が群在している」。「この土墩墓の盛土は版築ではなく一つの土墩墓の中に数個の埋葬がなされている。それらは地面に礫石を敷いたり、紅焼土を詰めたりして棺床としている。石を遺体のまわりに並べて囲ったり、あるいは石室を築いたりしている。その石室も竪穴式と横穴式の両タイプがある。これらの土墩墓はだいたい西周時代から春秋時代にかけてのものである」。「この墓から出土する遺物は、印文硬陶と原始施釉陶が大半であり、また青銅器も出るが、中原の文物とは異なった図文をもっており、銅剣は身柄一鏹のものである」。

宮本一夫氏⁷⁾は、「同じ江南でも、寧鎮（南京、鎮江）地区と太湖周辺地区は地形的な違いとともに中原の文化導入に相違があり、その結果、西周期以降墓葬の風習においても違いをもたらした。寧鎮地区は土墩墓であり、太湖周辺は土墩石室墓である。」と述べている。

中国中央民族大学の楊楠氏⁹⁾は江南の土墩墓を、図—1に示すように3地区に分けている。①黄山・天台山南地区、②太湖・杭州湾地区、③寧鎮地区。楊楠氏によると、「初め、土墩墓は夏と殷（商）の変わり目の頃（B.C. 1600年頃、著者記入）、浙江省の西南部と福建省の北部（黄山・天台山南地区）に出現した。これが殷代後期に太湖・杭州湾地区に、西周（B.C. 1050年～）前に寧鎮地区に拡大していった」。「黄山・天台山南地区と



① 黄山・天台山南地区、② 太湖・杭州湾地区、③ 寧鎮地区、図中の数字は土と石室墓がある地域。その内一部の地域名を以下に示す。

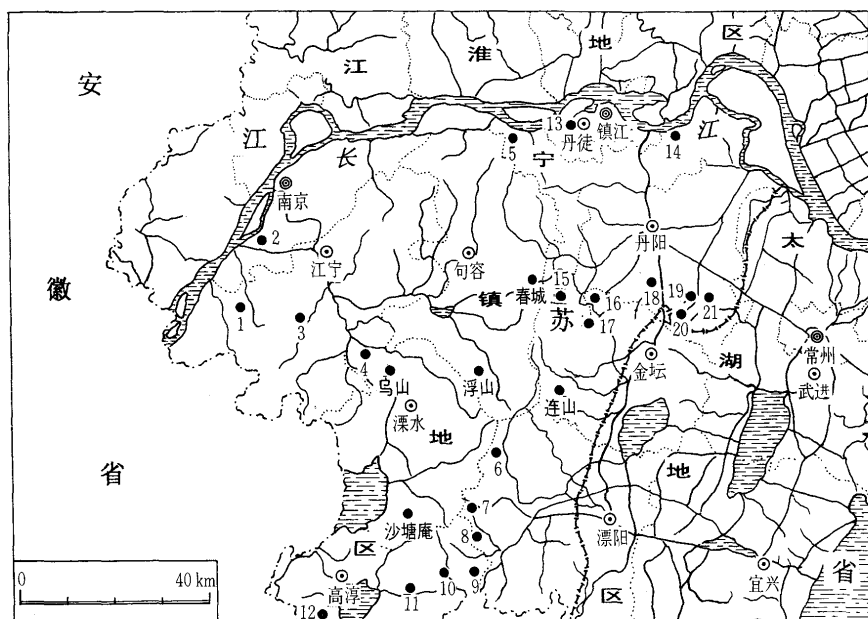
1. 鎮江 2. 丹徒 3. 丹陽 4. 江寧 5. 句容 7. 高淳 9. 銅陵
17. 金壇 21. 無錫 25. 蘇州 27. 湖州 29. 金山 32. 安吉 33. 德清
34. 余杭 38. 紹興 40. 余姚 41. 慈溪 43. 舟山 48. 屯溪 53. 金華
58. 上饒 59. 光澤 60. 蒼南

図一 江南における土墩墓分布図（参考文献9）より引用。一部書き直し）

寧鎮地区は土墩墓であり、石室墓がない。太湖・杭州湾地区は土墩石室墓が多い。「黄山・天台山南地区の土墩墓はほとんどが一墩一墓である。太湖・杭州湾地区と寧鎮地区の土墩墓は一墩一墓と一墩多墓の2種類がある」。

4. 調査した土墩墓

著者らは1998年11月、寧鎮（南京・鎮江）地区の土



図二 寧鎮地区における土墩墓分布地点と（●）と調査地点（烏山、沙塘庵、浮山、連山、春城）

墩墓を見て回った。図一2に示す5箇所の土墩墓群である。これらはB.C. 800～500年（西周～春秋時代）のもので、直径10～30 m、高さ2～5 mのほぼ円形の人工盛土である。のどかな田園地帯や丘陵地帯に分布しており、その数は数万個にも及ぶ。これらの土墩墓を口絵写真一6～7、写真一1～3に示す。

今回調査したほとんどの土墩墓は、頂上部まで開墾され、芋やトウモロコシなど農作物が植えられていた。また土墩墓の構築土を、煉瓦や道路工事の材料として利用するため、掘削され、姿を消したものも多い。部分的に掘削されて放置されたままのものや、近く完全に掘削・除去されるものもあった。

金壇の連山土墩墓は標高、数10～50 mの丘陵地に群をなして存在している。その数は270以上である。そのうちの一つの土墩墓で、かなりの部分が掘削されて崖状の断面を見せているものがあり、これから試料を採取した。口絵写真一8に示すように、層状に堆積しており、原地盤を含め5層からなる。上から4層目の白っぽい見える土が土墩墓の核をなすもので、この上の層（口絵写真一8(b)3層目）は、焼いた土を用いているようである。これらの物理的な性質を、土墩墓を構成する「下蜀黄土」〔鎮江郊外、句容市の切土斜面から採取〕とともに表一1に示している。吉野ヶ里丘陵土と同じく、礫を含まず、統一分類法ではMHに属する。この「下蜀黄土」は寧鎮丘陵を形成している。

著者の一人である張敏らによる連山土墩墓の考古学調査結果¹⁰⁾を一部紹介する。これは東西長21.7 m、南北22.5 m、高さ3.9 mの土饅頭型土墩墓である。図一3に示すように、原地盤を入れて7層からなる。第1層：表層5～20 cm、第2層：茶色土層（栗紅土）0～115 cm、第3層：黄色土層0～75 cm、土墩の頂部、第4層：薄い灰色土層、土墩墓の核である。0～86 cm、第5層：黄灰色土層、5～20 cm、敷均し層。第6層：黄色土層、5～15 cm、元の原地盤の表層、第7層：原地盤の茶色土層（栗紅色）。この第4層（深さ3.8 m）に土器や石を並べた石床（長さ2.4 m、幅0.6～1.4 m）、（図一3の記号M1）に死体を寝かせていたようである。石床の石の数は160個で、大きさは20～40 cm程度である。ここでは人の歯が見つかった。なお図中のQ6, Q7は陶器類の陪葬物である。この土墩墓を含めて、著者らが調査した土墩墓が果たして版築あるいは版築状の締固めがなされたかはまだ分かっていない。

5. あとがき

寧鎮地区の土墩墓のほとんどが頂部まで耕され、農耕地として利用されている。構築土が土木材料として

表-1 連山土墩墓群の一土墩墓の試料

	ρ_s (g/cm ³)	w_L (%)	w_P (%)	I_P	粒度分布 (%)				土の 分類
					礫	砂	シルト	粘土	
鎮江郊外自然土	2.706	50.5	23.2	27.3	0	10.5	69.5	20.0	MH
土墩墓第一層	2.765	55.5	25.4	30.1	0.0	6.4	44.6	49.0	CH
土墩墓第二層	2.709	38.0	19.6	18.4	0	7.4	55.6	37.0	MH
土墩墓第三層 (焼いた土)	2.759	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	焼き土
土墩墓第四層 (核)	2.721	36.5	18.7	17.8	0	5.2	64.8	30.0	MH



写真-1 頂部まで耕された土墩墓。連山

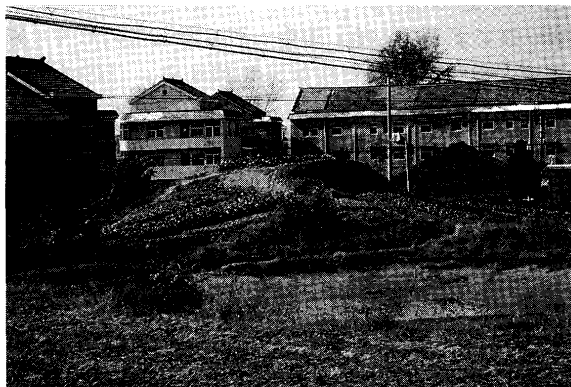


写真-2 住宅が迫る野菜畑の土墩墓。沙塘庵

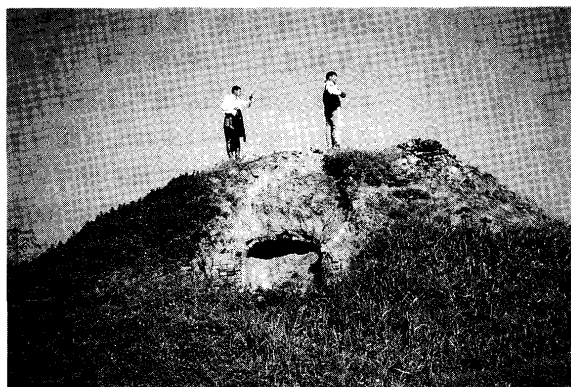


写真-3 煉瓦を焼く窯として利用されている土墩墓。春城

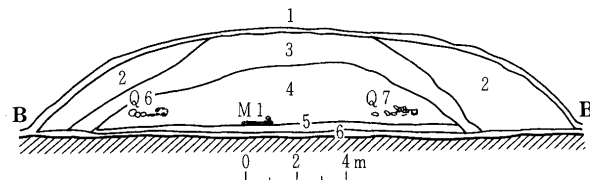


図-3 土墩墓断面図 (参考文献10)より引用)

適しているためか、掘削、破壊されるものが多いようである。寧鎮地区を含む江南の土墩墓は、数が多いことと経費の問題から、十分な調査がなされているとは言えない。しかも、地盤工学的な観点からの考察はほとんどない。

今回は、土墩墓の紹介に終わったが、今後は本格的な地盤調査を行って、地盤工学的な考察と構築の技術を解明を行い、吉野ヶ里墳丘墓との関連性について究明していきたい。

参 考 文 献

- 1) 鬼塚克忠・原 裕：吉野ヶ里遺跡・北墳丘墓の土質工学的特性，土と基礎，Vol. 44, No. 7, pp. 19~22, 1996.
- 2) 鬼塚克忠・原 裕・島 宏信・横尾磨美：吉野ヶ里遺跡・墳丘墓および戦場古墳群・33号墳の土質工学的特性と構築の技術，遺跡保存技術に関するシンポジウム発表論文集，pp. 113~120, 1995.
- 3) 鬼塚克忠・唐 曉武・張 敏：中国・江南の土墩墓，第34回地盤工学研究発表会発表講演集，pp. 347~348, 1999.
- 4) 森 浩一：図説 日本の古代史 4，諸王権の造型，古墳時代，中央公論社，pp. 36~40, 1990.
- 5) 樋口隆康：稲の伝来と日本の夜明け，内藤大典編，虹を見た，海援社，pp. 70~71, 1998.
- 6) 樋口隆康：弥生文化に影響を与えた呉越文化，内藤大典編，虹を見た，海援社，pp. 77~79, 1998.
- 7) 宮本一夫：呉越の文化，内藤大典編，虹を見た，海援社，pp. 62~66, 1998.
- 8) 安 志敏：吉野ヶ里と江南文化（副島清高訳），内藤大典編，虹を見た，海援社，pp. 72~74, 1998.
- 9) 楊 楠：商周時期江南地区土墩墓遺在の分区研究，考古学報，中国社会科学院考古研究所，考古雑誌社，No. 1, pp. 23~72, 1999.
- 10) 南京博物院・常州市博物院金壇県文物管理委員会：江蘇金壇連山土墩墓発掘報告，考古学集刊，pp. 161~194, 1996.

(原稿受理 1999.11.8)